

RYOWA

4

2009
No. 223

菱和

・ 特集：みんなのオフィス

・ 新常務が語る原点

・ 世界最大の太陽光発電事業スタート





Wide View

山下泰裕

●東海大学教授

「道場で培った精神を日常に活かす。
それこそが真の柔の道です。」

柔道選手として、ロスアンゼルス五輪金メダル、通算203連勝など、数々の偉業を成し遂げた山下泰裕さん。現在は母校・東海大学で教鞭を執る傍ら、柔道を通じた青少年教育や国際親善活動にも力を注いでいらっしゃいます。競技者としての姿勢やリーダーの心得、柔道家として目指すものについて、谷崎さんと原さんが伺いました。



谷崎 敦彦
ヒューマンケア・メディア本部
シニアマネージャー



原 幸一
食品本部 食品第二ユニット
ベトフードチーム

Interviewers

柔道の原点に立ち返る

谷崎 柔道は今やすっかり国際スポーツですね。

山下 国際柔道連盟には百九十九の国と地域が加盟しています。

谷崎 これだけ急速に広まった理由は何だとお考えになりますか。

山下 一つには、創始者・嘉納治五郎師範の力ですね。明治期に日本古来の柔術の各流派を一本化し、講道館柔道を興された嘉納先生は、少年時代から世界に目を向け、生涯、日記は英語でつけたというほ

ど、語学力にも優れた方。優秀な弟子を連れて積極的に海外に向き、柔道のデモンストレーションを行うとともに、柔道の理念「精力善用 自他共栄」(心身の力を最大限に活かし、人間と社会の進歩と発展に貢献すること)を伝え続けました。また、スポーツは教育上非常に有益であり、培ったものを人生に活かすことが大切であるとの考えに基づいて、陸上競技、水泳、ボートなどさまざまなスポーツを奨励された。日本のオリンピックとのかかわりを主導されたのも嘉納先生です。

Wide View

原 オリンピック種目となり、世界に「JUDO」が広まった結果、競技の有り様が創始者の理念からやらずれてきているのではないか、という声もありますね。この点はどうのお考えになりますか。

山下 柔道界でもそういう意見があります。海外の現状をとやかく言えるほど、日本の柔道界は立派でしょう。海外にもわれわれ日本人以上に柔道の心をよく学んでいる人はたくさんいます。われわれはまず、自分たちがどうあるべきか、何ができるのかを考えるべきであり、そこからしか現状を変える力は生まれてこないと思います。

日本柔道連盟では、二〇〇一年から「柔道ルネッサンス」と称し、嘉納師範の理念に立ち返って、柔道を通じた人間教育に取り組んでいます。嘉納先生は、なぜ「柔道」と名

付けられたのか。この「道」に大きな意味があるのです。柔道の極意で

やました・やすひろ ●1957年熊本県生まれ。東海大学大学院体育学研究科修了。全日本選手権9連覇、ロスアンゼルス五輪無差別級金メダル、203連勝を達成し、84年に国民栄誉賞受賞。85年現役引退。アトランタ、シドニー五輪の日本代表監督、国際柔道連盟教育コーチング理事を歴任。現在、東海大学体育学部教授、NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長、神奈川県体育協会会長。著書に「武士道とともに生きる」(奥田碩氏との共著)などがある。

ある最小限のエネルギーを最大限に活かすこと。相手の力を利用すること。戦う相手を尊敬し、互いに高め合うこと。そして、道場で投げられてもしめられても立ち上がり、稽古に励むこと。こうしたことを日常生活や人生において活かしていくことが大切なのです。例えば、お年寄りに席を譲る、困っている人に声を掛ける。また、自らが困難にぶつかったとき、失敗したときにも、新たな目標を見だし、周りの人を思いやって、自分と社会のために行動していく。それができてこそ、本物の柔道家だと思っています。

谷崎 ルネッサンス、原点に戻るということですね。当社でも現在の厳しい経済環境の中で、商社としての原点に立ち返ろうと努めているところです。

山下 通じるものがありますね。ただ、オリンピックや世界選手権に出るような選手にとって、最大の関心事はいかにして勝つか。私自身、現役時代は勝利を勝ち取ることにエネルギーを集中させていましたし、競技者としてはやはり勝負へのこだわりを失ってはならないと思います。現役選手にとつての柔道は、「武道」というより、「武道的な要素を強く持つスポーツ」と言った方が正



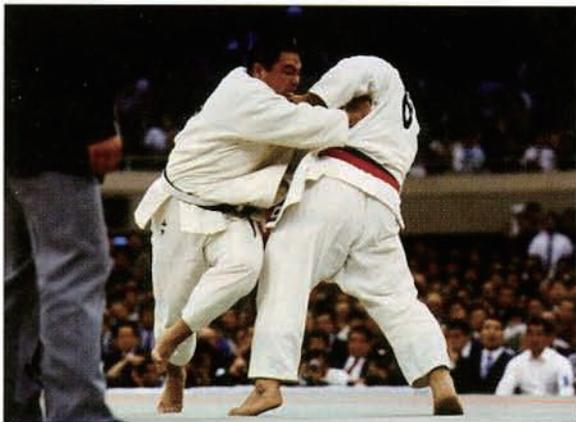


Photo by Shinichi Yamada/AFL0

しいかもしれません。

原 私も長年、剣道を続けているのですが、いざ試合になると、武道としての理想の動きを離れ、早く「当てる」勝ちたくなってしまふ。いつもジレンマを感じています。

山下 個人的には、競技は競技として割り切った上で、ここを欠いたら柔道でなくなる、剣道でなくなるという点については、ルールとして明文化していくことが大事だと思います。例えば、アテネオリンピックで日本チームが大勝した後、世界のライバル国は日本選手に柔道をさせない戦法に出ました。姿勢を悪くしたり、足を取ったりして、ともに組ませない。これに対して、世

界の柔道の専門家から「これは柔道じゃない、ジャケットレスリングだ。こんな状態では柔道は滅びてしまふ」という声が上がリ、ルールが変更されました。今では、いきなりズボンを持ちたり、姿勢を低くして組むことは反則とされています。

柔の心を世界に

谷崎 先生の柔道は、まさに姿勢を正しくして、一本を狙う戦い方でした。

山下 私が目指したのはちよつとしたチャンスでも確実にものにする、隙のない柔道。格好良く見せないなどと思つたことは一度もありません。「人を感動させるような試合がしたい」と言う選手もいますが、私には違和感がある。個人的には、きれいに投げることも何よりも、大事なものは、ひたむきに戦うことだと思つています。勝負以外のこだわりは捨て、ひたすら無心に戦う姿が、見る人の感動を呼ぶのではないのでしょうか。

一方で、特に海外での試合では、「日本柔道を背負っている」という意識も強く持っていました。勝負にはこだわらねど、勝てばいいってもんじゃない、おれを見て日本柔道を

「ひたむきに戦う姿勢が大事」

アジア各国からの留学生たちに柔道の精神を語る



問われるのだから、卑怯な振る舞いや見苦しい姿勢は見せられない。と。潔さとか昔の武士の誇りのようなものを少しは持っていたのかもかもしれません。

谷崎 当社の三綱領の一つ「処事光明」と相通じるところです。当たり前と言えは当たり前ですが、常に認識を新たにしなければならぬことだと考えています。

山下 フェアプレー精神は、柔道に限らず、どのスポーツにおいても一番大切なこと。私は今、神奈川県体育協会の会長として、スポーツを通してしたい止め防止に取り組んでいきます。強い者が弱い者をいじめ、大勢で一人をいじめることはもちろん、「自分に非があった」と認めたら

に対しても、さらに非難を加えるようなことは、最もフェアプレーの精神に反する行為です。子どもだけでなく、大人たちにもぜひ、日常生活でのフェアプレーについて考えていただきたい。それによって社会が少しでも良い方向に変わっていくと願っています。

原 現在はNPO活動にも注力されているそうですね。

山下 世界百九十九の国と地域の中には、柔道を学ぶ環境が整っていないところも多い。暁はおるか、柔道着も満足に手に入らない地域もたくさんあります。われわれは学生ボランティアの力も借りながら、日本全国から集めたりサイクルの柔道着を送ったり、教材を翻訳したり、指導者を派遣したりして、世界各地で柔道を学ぶ人々を支援しています。それまでTシャツと短パンで練習していたところから、「柔道着を頂いたおかげで、初めて柔道の崩しが分かった」などと手紙をもらうこともあります。

同時に柔道の普及を通して、柔道の心、日本の心を世界に伝えていきたいという思いもあります。礼に始まって礼に終わる武道精神を共に学びつつ、海外に広めていくことで、世界の人々に日本をよりよく



パリ日本文化会館にて。現地の柔道指導者に技術指導



NPO柔道教育ソリダリティーが設立を支援した「中日友好青島柔道館」の開館式にて

Wide View

知ってもらおうことにもつながるのではないかと考えています。
原 スポーツを楽しんでもらいながら、国際親善の種をまいていく。素晴らしい活動ですね。

人間力を磨く

谷崎 “礼”のお話に関連して、ガッツポーズの問題について伺いたいと思います。私は小学生に空手を教えており、空手ではガッツポーズは反則とされていますが、子どもたちよりもむしろ親たちがなかなか理解してくれない。先日のお大会でもガッツポーズによる反則負けが出て、大騒ぎになりました。
山下 そうやってワーツと文句を

言いに来たときがチャンスなんですよ。空手とは、道とは何なのか、それが人生においていかに大切なことなのか、じっくり話し合うきっかけにできる。まず大人たちが変わらなければ、子どもたちは付いてきません。

ガッツポーズは柔道では反則ではありませんが、賛否両論あります。個人的には、勝った瞬間自然に出る喜びの表現は許されるのかな、と思っています。というのも、私自身、オリンピックで優勝した瞬間にガッツポーズを取ったんです(笑)。ただ、本当はまず相手に礼を尽くし、試合場を降りてから喜びを表す方が数段格好良いと思います。それだけの気持ちのコントロールが



インタビューを終えて

同世代の英雄とお話できて感激でした。「現役時代は死ぬ気で試合に臨んでいた」「リーダーの資質は突き詰めれば人間力である」と語る言葉には世界の頂点に立った自信が裏付けされていました。振り返って自分の毎日の日常を反省するに、もっとひたむきな姿勢と日々の鍛錬が必要と痛感した次第です。

谷崎 敦彦
ヒューマンケア・メディア本部 シニアマネージャー

小学生から剣道を続けている私にとって、試合場での勝負だけにこだわるのではなく、日常生活の中で武道の精神を実践することが大切であるという山下先生のお話は誠に共感しました。また、世界柔道の頂点を極めたにもかかわらず、現在は原点に立ち返って柔道修行を実践されているお話にも感動しました。私たちの業務環境は厳しさを増していますが、原点に立ち返り、日々の業務・日常生活を精一杯全うしようという勇気を頂きました。

原 幸一
食品本部 食品第二ユニット ペットフードチーム

できるようになれば、社会生活においても常に冷静さを失わずにいられるのではないのでしょうか。選手が思わずガッツポーズしてしまったときには、審判がいさめ、礼を優先させるような形が理想だと思います。
谷崎 最後に、現役時代は日本柔道をリードされ、引退後はさまざまな組織の長を務められてきた山下先生に、リーダーにとって大切な資質を伺いたいと思います。
山下 「この人と一緒に仕事したい」「この人のために働きたい」と言われるような人間としての魅力、人間力を磨いていくことではないでしょうか。私は人間は死ぬまで成長できると考えています。自ら燃えている人

は、周りの人の心にも火を付けていく。組織の一人ひとりが生き生きと活動している状態が私の理想です。
スポーツの世界は、先生が来た途端にピンと空気が張りつめる場面がよくあるでしょう。私はあれが嫌いなんです。オフィスでも道場でも、私が顔を出した瞬間にみんながパツと輝く、そんな人間になりたいですね。
原 今日はまさに先生の言葉からエネルギーを頂きました。現在、リーダーとして奮闘している社員はもちろん、将来のリーダーを目指している若手社員にもエールを送っていたいだいたと思います。お忙しい中、ありがとうございます。